

【講演テーマ】街角にみる歴史

ーポーランド・ワルシャワー

【講師】東保 光彦 氏／ポーランド日本情報工科大学

日本文化学部 副学部長・教授

この20年ほど、私はポーランドの首都ワルシャワに住み、大学で日本の文化や歴史を教えている。外国に在って初めて、日本の歴史をおもしろいと思うようになった次第である。

そこで今日は、日本ではあまり馴染みがないと思われるポーランド、ワルシャワのお話をしたい。私のご紹介するエピソードと写真から、ワルシャワのまちの歴史を垣間見ていただければと思う。



実は、ワルシャワのまちは、第二次世界大戦中にまちの90%以上が破壊されるという惨状に見舞われたのだが、現在では破壊される以前の姿をすっかり取り戻している。いかにしてかつての姿に再生したかという、200年以上前に描かれた絵にあるまちの景色を参考にしたのだそうだ。そうして、40数年にわたり、かつての建物の壁のシミまで再現し、見事なまでにまちの復興・復活をとげたのである。そして今や、そういう歴史遺産を生かし、ヨーロッパでも有数の「歴史観光のまち」となっている。

1. ポーランド・ワルシャワの歴史

ポーランドは、フランス、ドイツ、チェコ、スロバキア、ウクライナ、ロシア等の国々に囲まれて在る。中世のワルシャワというのは、ぱっとしない小さいまちだったようだ。そのワルシャワが発展するのは、1596年にクラクフから遷都されて以降のことだ。

歴史を紐解けば、「西はパリ、東はモスクワ」と称えられた時代から、その二つの都市の真ん中に位置するワルシャワは東西の交通の要衝であり、地政学的に非常に重要な地であった。それゆえ特に近現代では、常に周辺諸国から狙われ、三度の「ポーランドの分割」により国家として消滅した時期もある。第一次世界大戦を経て国は再興するものの、すぐに第二次大戦が始まりドイツに占領される。ポーランドというのは、他国に占領され続けた弱い国だったと言える。1944年、絶望的な戦いと知りつつワルシャワは蜂起する。その結果、まちはドイツ軍により破壊され、瓦礫の山と化すのである。

しかし1989年、ポーランドは東欧初の民主政権の国をつくるのである。このような歴史の痕跡が、今もまちの建物や広場に、いたるところに残されている。

私の勤務する大学には、新しい建物と並んで、廃校となった看護学校の古い校舎があるが、その外壁には第二次大戦中に付けられた弾丸の跡がある。また、大学の隣に建つ1736年にできたポーランドで一番古い孤児院の看板には、「戦争中はユダヤ人の子供をかくまった」などと書かれている。そして、大学の向かいにある120年ほど前に設けられた浄水場の給水塔には、「1944」というワルシャワ蜂起の年と蜂起のシンボルマークが描かれている。

こんなふうに、街角どころか、自分の庭のようなところに歴史を物語る跡が見られるのだ。

2. ワルシャワのまちを歩いて、見えたもの

今回、私はワルシャワのまちをご紹介するにあたり、実際に大学の在るあたりから歴史地区まで散歩してみた。歩いてみると、いろいろな面白い発見があるものだ。

●古いもの、新しいもの

大学から中央駅の方へ歩いてみる。まず、ワルシャワ中央部を東西に走る「エルサレム大通り」は、その名前が面白い。「ワルシャワに、エルサレム？」と思うが、かつてこの通りの先にはユダヤ人の村があったのだそうだ。

中央駅のすぐ近くにある「文化科学宮殿」はスターリンの時代に建てられたロシアからの贈り物で、いかにもロシア風の建物だ。ワルシャワ市民には非常に評判が悪く、「超高層ビルで囲んで見えないようにしてしまおう」などと言われている始末。

驚いたのは、1910年からある有名な「立体写真館」。ここでは100年以上前の、破壊される以前のまちの写真が見られる。のぞき窓から当時の風物が立体的に見られる仕掛けだ。

ご多分に漏れず、中心街には超高層ビルがそびえ、マリオット・ホテルもスター・ボックスもある。ただ、印象的なのは、大きな建物の後ろをちょっと振り返ると、よく教会が見えること。ワルシャワはそういうまちだ。つぶされてもつぶされても、まちを再生することを重ね、結果的に教会は守られてきたということなのだろう。



●時代の移ろい

さらに先を進むと、通りの角に共産主義時代からあるホテルがある。そこにはモニュメントがあり、「ここは祖国の自由を願うポーランド人の血で洗われた場所である」「1944年1月28日、ヒットラーの軍隊がここで102人のポーランド人を射殺した」と記されている。こういうものは、まちのいたるところで見られる。

そして、「旧共産党本部（ポーランド統一労働者党）」の建物。当時は政府要人の居場所だったが、現在はなんと証券取引所が入っている。昔は共産主義の神殿、いまは皮肉なことに資本主義を象徴する建物というわけだ。

その手前には、ポーランド開放に尽力したフランス大統領だったド・ゴールを讃える広場があり、彼の銅像が見える。

●観光客、にぎわい

さて、「新世界通り」に出る。この通りはお洒落な通りで、特にクリスマスシーズンはイルミネーションが非常に美しい。

通りの角にある建物の壁には「全国民は自分たちの首都を建設する」との文言が刻まれている。「他のまちはどうでもいい、ワルシャワだけ何とかしよう」とも読める非常に中央集権的なスローガンだなど思っているのだが……。いずれにせよ、これを掲げて破壊されたまちを建設し直してきたわけだ。

新世界通りは、観光コースと言える。コペルニクス像が前にある「ポーランド科学アカデミー」。ショパンの心臓が納められている「聖十字架教会」。200年の歴史がある「ワルシャワ大学」。ワルシャワ大学の中にはショパンの家族が住んでいた部屋が残っている。その隣にある「大統領官邸」は、かつてはロシアのポーランド総督の居場所だったという。

ちなみに、ポーランド出身の有名人といえば、コペルニクス、ショパン、そしてキュリー夫人。この3人はみなワルシャワにゆかりがある。それで、特にショパンに関しては、この通りの近くに「ショパン博物館」があるし、歴史的な場所をめぐる観光コースには市民や旅行者向けに「ショパンのベンチ」なるものが設置してある。ベンチに付いているボタンを押すとショパンの曲が流れ、楽しませてくれる。

さて、通りを進むと、王宮広場にぶつかる。広場にあるのは、ワルシャワに遷都した「ジグムント3世の碑塔」、「ワルシャワ城（旧王宮）」。そして、その向こうには旧市街地、つまり「ワルシャワ歴史地区」が広がっている。

●まちの姿

「ワルシャワ歴史地区」は世界遺産として登録されており、今や旅行者向けの観光地となっている。旧市街地に入るあたりの通りには、カナレット（Canaletto）が1774年に描いた絵が飾ってある。彼は旧市街の姿を非常に精密に描いて残しており、これがワルシャワ再建にたいへん役立った。壁のひび割れなど、描いてあることはすべて再現したわけだ。

その歴史地区を囲んでいる壁を修復する際には、残っていたオリジナルのレンガも積まれている。外壁の跡の堀があり、ワルシャワの旧市街は非常に小さかったことがわかる。

ステンドグラスの美しい、ゴシック様式のシンプルな教会「聖ヨハネ大聖堂」の少し先にあるのは、「旧市街市場広場」。そこにある建物は、建て替える度に新しい様式で建て直されたため、ゴシック、ルネッサンス、バロック、クラシック等々の様式のもの混在している。

さて、城門を出たところにキュリー夫人の生家があるが、今は小さな博物館になっている。そこから少し行くと、新市街だ。

●戦いの跡

1411年に建てられたという、ワルシャワで一番古い教会がある。そこから少し先に、ユダヤ人の居住地区だったゲッターを囲む壁が残っている。壁には「MUR (壁) GETTA 1940～1943」という標識が見える。そのすぐ近くには、ワルシャワ蜂起のときにマンホールから出てきた人々をかたどった記念像がある。そして、もう少し先には広い広場があり、「無名戦士の墓」がある。これは戦災で壊れたサスキ宮殿の、残った一部を修復して造られた墓だ。ちなみに、この広場はメーデーなどの集会場として使われたりしている。

前述のカナレットは、ポーランド最後の国王（スタニスラフ 2 世 アウグスト・ポニャトフスキ）を選挙するときの様子を描いた絵を残している。なんと、この国は 200 年前に、選挙でもって王を選んでいたのだ。スタニスラフ 2 世は、文化への理解も深く、彼の時代につくられたものはたくさん残っている。現在のワルシャワの姿に非常に貢献した人と言える。

しかし、早すぎた民主主義というのは時代にそぐわなかったのか。周りのロシア、プロイセンは軍備拡張を進め、ポーランドに侵攻し、結果的にポーランドの国は亡くなる。そして第一次大戦、第二次大戦へと巻き込まれていく。破壊され、しかし再生し、今に到る。

3. そして、まちには歴史が刻まれ続ける

ポーランドのまちではバチカンの国旗をよく見かける。1978年、ポーランドは歓喜にわいた。現法王の2代前だが、ポーランド人のヨハネ・パウロ2世が、イタリア人以外の初のローマ法王として、バチカンのトップに就いたのだ。

そして、2014年、ポーランドのドナルド・トウスク首相がEUのトップに選出されるという、夢のような出来事が起きた。



今やEUは、シェンゲン協定により国境などなくなったも同然。どこで働くにもパスポート、ビザは不要。ポーランドとドイツの関係も現在は良好だ。なんといっても近いので、ポーランドからドイツへ働きに行くなど人の往来は多い。歴史のことを言い始めたらキリがないわけで、ビジネスはビジネスと割り切っているのだろう。ただ、ロシアについては、なかなか溶け込めないようだ。ただし、ロシアとのビジネスについては、現在、大きな割合を占めている。

そして、現在ポーランドには、250~270社の日系企業が進出している。また、名古屋学院大学と私どもの大学は交流協定を結んだ。このような状況が進めば、人の交流も盛んになり、観光で訪れる人も増えるだろう。

そのようにして時代は移り変わり、まちにはまたその歴史が刻まれていくのだろう。